

4/5(土)ー6/29(日)

休館日:月曜日(5/5は開館)

立ちのぼる生命  
宮崎進展

BREATH OF LIFE: Shin MIYAZAKI



宮崎進《横たわる》2001年 写真:安齊重男

宮崎進(1922-)は、20歳で日本美術学校を繰り上げ卒業し出兵、1949年までシベリアに抑留されました。戦後は取材に基づく写実的な作風を展開し、1967年には安井賞を受賞します。一方、1950年代から用いている布のコラージュは、1980年代以降、その規模が大きく抽象的になります。2004年のサンパウロ・ビエンナーレ日本代表に選ばれた宮崎の創作の根底には、敗戦と抑留の飢餓的狀況から見つめ直された生命への強い想いがあります。本展では、1950年代から近年の約80点の作品に資料類を加えて、宮崎進の創作の全貌を回顧します。

6/30(月)ー7/11(金) 展示替休館

7/12(土)ー9/15(月・祝)

休館日:月曜日(7/21、9/15は開館)

いろ・うごき・かたち

アートをめぐる夏の冒険

Color, Motion, Form:  
Summer Adventure in Art



保坂毅《Stripe05 (Kiwaku)》2006-08年 当館蔵

一色海岸に面して建てられた、展示室からも海の見える葉山館。三ヶ丘の緑と海や空に囲まれて、きらめく光と変化する景色に包まれた場所です。この夏、海辺の美術館はアートとの出会いの予感にみちています。美術館ははじめてというかたから、近現代美術の多様性を新鮮な眼で見直したいかたまで、展示室や野外空間で出会う作品やワークショップを通して、美術と自然、人々とのコミュニケーションを体験できる展覧会です。

9/16(火)ー9/26(金) 展示替休館

9/27(土)ー1/12(月・祝)

休館日:月曜日(10/13、11/3、11/24、1/12は開館)、12/29(月)ー1/3(土)

東欧のアニメをめぐる旅

ポーランド、チェコ、クロアチア

Animation from East Europe:  
Creators in Poland, Czech, and Croatia



プラハの人形アニメーション・スタジオに作られたジオラマ 1967年

イジー・トゥルカなど人形アニメーションの伝統を誇るチェコの首都プラハと、カレル・ゼマンやヘルミーナ・ティールロヴァーが活躍した東部の都市ズリーン。第二次世界大戦後に新聞漫画家や画家が集まってアニメーションを作り始めたクロアチアの首都ザグレブ、そして「タンゴ」(1983年)と「ピーターと狼」(2008年)で2度のアカデミー賞を獲得したアニメーション・スタジオ「セ・マ・フォル」の拠点、ポーランドのウッチ。東欧の3カ国4都市を採り上げ、それぞれの街の歴史とともに、個性あるアニメーション作品を紹介します。

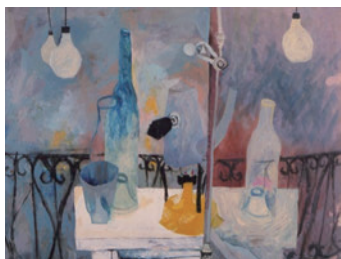
1/13(火)ー1/23(金) 展示替休館

1/24(土)ー3/22(日)

休館日:月曜日

金山康喜のパリ  
(1951-1958)と  
日本人画家たち

KANAYAMA Yasuki in Paris  
(1951-1958) & Japanese Painters



金山康喜《静物(コーヒーポットのある静物)》1954年 富山県立近代美術館蔵

金山康喜(1926-1959)は、1951年に経済学を学ぶために留学したフランスで、以前から惹かれていた絵画制作にのめりこんでいきました。1950年代のフランス画壇では、具象、半具象、抽象といったさまざまな画風が熱気を帯びて誕生してきつつあったのです。新鮮な具象画で当地でも注目を浴びるなか、1959年に33歳の若さで急逝した金山の作品約80点を、野見山暁治や田淵安一といった友人らの作品約80点と合わせて展覧し、1950年代パリの熱い絵画思潮を回顧します。

4/5(土)ー6/8(日)

休館日:月曜日(5/5は開館)

一原有徳 1910ー2010

版一無限の可能性

ICHIHARA Arinori 1910-2010:  
A Retrospective



一原有徳《銅のメモ》1974年 当館蔵

一原有徳(1910-2010)は、徳島県那賀川町に生まれ、3歳の時に一家で北海道に渡り、小樽を拠点に旺盛な版画制作を行いました。1950年代後半、最初に、石版石を用いたモノタイプに着手。以来、一貫してモノタイプと実験的な金属凹版による表現を探索し、国内外で高い評価を得ています。銅、鉄、亜鉛、アルミニウム、ステンレス、あるいは廃車のボディといった金属の表面を、叩き、削り、腐蝕させて版とし、既存の常識を打ち破り、版画の可能性を拡張し続けました。抽象表現でありながら、鑑賞者の想像力を刺激してやまない、一原有徳の「版の世界」を一望します。

6/9(月)ー7/4(金) 展示替休館

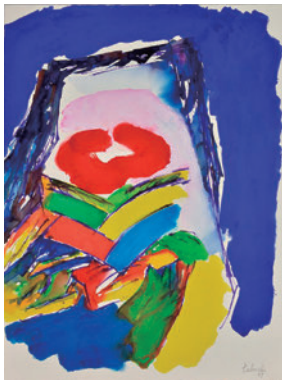
7/5(土)ー9/15(月・祝)

休館日:月曜日(7/21、9/15は開館)

フランスで活躍した画家

田淵安一  
知られざる世界

The Unknown World of Yasse TABUCHI



田淵安一《無題》1989年 当館蔵

田淵安一(1921-2009)は、フランスを拠点に第一線で創作活動を続けた芸術家です。2006年に葉山館で大規模な回顧展を開催しました。2009年にフランスで作家が亡くなられた後、ご遺族より田淵安一の水彩画や版画作品などが寄贈されました。これを記念して開催する本展では、田淵の作品約100点を中心に、彼が収集し制作の着想とした他の作家たちの版画、そして当館が所蔵する田淵の油彩画なども交えて、田淵安一の世界を展覧いたします。

9/16(火)ー9/26(金) 展示替休館

9/27(土)ー1/12(月・祝)

休館日:月曜日(10/13、11/3、11/24、1/12は開館)、12/29(月)ー1/3(土)

コレクションの対話

近代美術の傑作

Conversations between Collections:  
Masterpieces of The Museum of  
Modern Art, Kamakura & Hayama



海老原喜之助《川辺にて》1962年 当館蔵(北川原コレクション)

2008年に美術愛好家の北川原夫妻から寄贈された「北川原コレクション」は、翌年に鎌倉別館で開催された同名の展覧会後も藤田嗣治の《横たわる裸婦》などの追加寄贈を受け、さらなる充実を遂げています。当館の収蔵内容と呼応するかのように入集されてきた北川原コレクションを、当館のこれまでの所蔵品とあわせて展覧し、現在の美術館が誇る近代美術の傑作選ともいべき内容をご紹介します。

1/13(火)ー1/23(金) 展示替休館

1/24(土)ー3/22(日)

休館日:月曜日

湘南の画家たち

Artists in Shonan



岸田劉生《初夏の麦畑と石垣》1920年 当館蔵

明治期に欧米から海水浴や保養の習慣が伝えられ、別荘地として独特の文化が生まれた相模湾一帯。大正期には岸田劉生や萬鉄五郎が療養生活を送り、これを訪ねた鳥海青児や原精一へと創作の熱が受け継がれました。富士や箱根を望む風光は、黒田清輝をはじめ山口蓬春や朝井閑右衛門など、この地に滞在し、あるいはアトリエを構えた多くの作家を惹きつけ、今日までさまざまな創作の拠点となっています。湘南で制作し人生を送った美術家たちの仕事を紹介します。

4/5(土)ー6/22(日)

休館日:月曜日(5/5は開館)

新収蔵作品展

併陳:小泉淳作デッサン展

New Acquisitions of 2013 &  
Drawings by KOIZUMI Junsaku



(上)村山知義《ヘルタ・ハインツェ像》1922-24年 当館蔵  
(右)小泉淳作《南豆海岸》1974年 当館蔵

2013(平成25)年度に収蔵された購入・寄贈・寄託作品を紹介します。ロートレックのポスターやサン・ジョヴァンニの油彩画から斎藤清の木版画まで、多数の作品のなかでも特に注目されるのが村山知義の名作《ヘルタ・ハインツェ像》です。

あわせて、新収蔵作品から、鎌倉で制作を続けた日本画家、小泉淳作(1924-2012)のデッサン約30点を特集展示します。



6/23(月)ー7/4(金) 展示替休館

7/5(土)ー9/15(月・祝)

休館日:月曜日(7/21、9/15は開館)

ベン・シャーンと  
ジョルジュ・ルオー

Ben Shahn and Georges Rouault

ベン・シャーン 版画集「一行の詩のためには……」リルケ『マルテの手記』より(思いかけぬ邂逅) 1968年 当館蔵(麻生コレクション) ©Estate of Ben Shahn/VAGA, New York & JASPAR, Tokyo, 2014 D0469

帝政ロシアのユダヤ人家庭に生まれアメリカに移住し活躍したベン・シャーン(1898-1969)と、パリに生まれパリで活躍したジョルジュ・ルオー(1871-1958)。二人の画業や人生には、直接の交わりはありません。しかしその作品の底にはともに、深いヒューマニズムと喜びとが宿っています。リルケの『マルテの手記』に寄せたベン・シャーンの版画シリーズ、そしてルオーの『ミゼレーレ』など、版画による二人の代表作を中心に、心の奥底を揺さぶる、静かで力強い表現をご覧ください。

9/16(火)ー9/26(金) 展示替休館

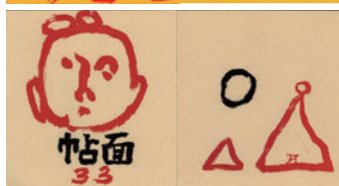
9/27(土)ー1/12(月・祝)

休館日:月曜日(10/13、11/3、11/24、1/12は開館)、12/29(月)ー1/3(土)

美術と文学の交流

麻生三郎の  
装幀・挿画展

Book Designs and Illustrations by  
ASO Saburo



帖面8号(1960年/上)、33号(1968年/下)表紙 当館蔵

画家・麻生三郎(1913-2000)は、絵画の制作だけでなく多くの装幀・挿画を手掛けた。なかでも季刊雑誌『帖面』(1958~1982年、帖面舎)では、表紙やカットのほか編集にも携わりました。本展では、『帖面』全59冊とその表紙やカットに用いられた当館所蔵のデッサン類に加え、野間宏『真空地帯』、椎名麟三『永遠なる序章』、三好十郎『三好十郎作品集』の装幀・挿画のために描かれた原画約50点を展示。油彩画とは異なる、小さな本に広がる麻生三郎の豊かな世界を紹介します。

1/13(火)ー1/23(金) 展示替休館

1/24(土)ー3/22(日)

休館日:月曜日

幻想の系譜

一ゴヤから象徴派まで

The Genealogy of Fantasy:  
From Goya to Symbolism



フランススコテ・ゴヤ 版画集「気まぐれ」より No.72(お前は逃げられまい) 1796-98年 当館蔵

18世紀末から19世紀末の西洋版画コレクションによって、幻想芸術の流れを紹介します。フランス革命により従来の価値観が変化したヨーロッパでは、現実世界の混乱、喪失を背景に、独自の想像世界へと向かう作家たちが現れます。悪魔や妖怪が跋扈し、人間の愚行を戯画的に描いたゴヤ。幻想、不可視なものへの狂熱は、近代へ向かう19世紀、ロマン主義から象徴派の作家によって継承されます。ドラクロワをはじめ、ルドン、クリンガーらが描く夢や神話の世界は、文学や音楽と響きあいながら、その深淵なる想像力を今なお湛えています。

●スケジュールの内容は変更される場合があります。